



<2007 H19010111>

### 注意事項

- 1 問題冊子および記述解答用紙は、試験開始の指示があるまで開かないこと。
- 2 問題は2～10ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
- 3 解答はすべて解答用紙の所定欄にHBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
- 4 受験番号および氏名は、試験が開始してから、正確に正しいに記入すること。記述解答用紙の所定欄（2か所）には受験番号と氏名を、マーク解答用紙の所定欄には氏名のみを記入すること。

受験番号の記入にあたっては、次の数字見本に従い、正確に正しいに記入すること。

数字見本	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9

- 5 マーク解答用紙のマーク欄は、はっきり記入すること。また、訂正する場合は、消しゴムで正しいに、消し残しがないようによく消すこと（砂消しゴムは使用しないこと）。

マークする時	● 良い	○ 悪い	○ 悪い
マークを消す時	○ 良い	○ 悪い	○ 悪い

- 6 試験終了の指示がでたら、すぐに解答を止め、筆記具を置くこと。終了の指示に従わず解答を続けた場合は、答案のすべてを無効とするので注意すること。
- 7 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。
- 8 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

(一) 次の甲・乙を読んで、あとの問いに答えよ。

甲

〔次の文章は、韓愈の「送李愿帰盤谷序（李愿の盤谷に帰るを送る序）」の一節である。なお、一部の送り仮名、返り点は省いてある。〕

窮<sup>シテ</sup>居<sup>シテ</sup>而<sup>シ</sup>閑<sup>シ</sup>処<sup>シ</sup>、升<sup>リテ</sup>高<sup>キニ</sup>而<sup>シテ</sup>望<sup>ム</sup>遠<sup>ク</sup>。坐<sup>シテ</sup>茂<sup>ク</sup>樹<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>終<sup>レ</sup>日<sup>ヲ</sup>、濯<sup>ニ</sup>清<sup>ク</sup>泉<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>自<sup>ラ</sup>潔<sup>ク</sup>。採<sup>ツテ</sup>於<sup>ニ</sup>山<sup>ニ</sup>美<sup>ク</sup>、可<sup>ク</sup>茹<sup>ク</sup>、釣<sup>ツテ</sup>於<sup>ニ</sup>水<sup>ニ</sup>鮮<sup>ク</sup>、可<sup>ク</sup>食<sup>フ</sup>。起<sup>リ</sup>居<sup>ク</sup>無<sup>ク</sup>時<sup>ヲ</sup>、惟<sup>ニ</sup>適<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>安<sup>ン</sup>。与<sup>リ</sup>其<sup>ノ</sup>有<sup>ラ</sup>誉<sup>ハ</sup>於<sup>ニ</sup>前<sup>ニ</sup>、孰<sup>ニ</sup>若<sup>ク</sup>無<sup>ク</sup>毀<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>後<sup>ニ</sup>。与<sup>リ</sup>其<sup>ノ</sup>有<sup>ラ</sup>樂<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>身<sup>ニ</sup>、孰<sup>ニ</sup>若<sup>ク</sup>無<sup>ク</sup>憂<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>心<sup>ニ</sup>。車<sup>ノ</sup>服<sup>不</sup>維<sup>フ</sup>、刀<sup>ノ</sup>鋸<sup>不</sup>加<sup>ハ</sup>、理<sup>乱</sup>不<sup>レ</sup>知<sup>ラ</sup>、黜<sup>陟</sup>不<sup>レ</sup>聞<sup>カ</sup>。大<sup>カ</sup>丈<sup>夫</sup>、不<sup>レ</sup>遇<sup>ス</sup>於<sup>ニ</sup>時<sup>ノ</sup>者<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>為<sup>ル</sup>也<sup>ナリ</sup>。我<sup>ハ</sup>則<sup>チ</sup>行<sup>ハ</sup>之<sup>ヲ</sup>。

〔注〕「車服」：制度で決まっている官吏の乗り物や服装。

「刀鋸」：刑罰を与える際に用いる器具。

「黜陟」：降任と昇進。

問一 問題文甲の傍線部1「孰若」の読みとして最も適切なものを、次のイ～ホの中から選び、マーク解答用紙に答えよ。

- イ いづれぞ      口 かくのごとき      ハ たれゆゑか      ニ なんぞもしは      ホ まづもつて

問二 問題文甲の傍線部2「理」とほぼ同じ意味で、そのまま置き換えることも可能な漢字は次のうちどれか。最も適切なものを、次のイ～ホの中から選び、マーク解答用紙に答えよ。

- イ 秩      口 修      ハ 法      ニ 治      ホ 収

問三 問題文甲の傍線部3に付けるべき返り点を四つ、解答欄（記述解答用紙）の白文に記せ。なお、送り仮名を書く必要はない。

問四 この文章の主旨として最も適切なものを、次のイ～二の中から選び、マーク解答用紙に答えよ。

- イ 位人臣を極めた後は、いさぎよく都を去って隠棲することこそ、大人物の人生にふさわしい。  
口 官仕えの贅沢な暮らしに慣れると、時に田舎での質素な暮らしがうらやましく思われてくる。  
ハ 世に受け入れられないときこそ、立派な人間は世間を遠く離れて素朴な生活をすべきである。  
ニ 不遇なときにはかつての貧乏な暮らしを思い出し、身を引き締めて名誉回復に努めるべきだ。

乙

〔次の文章は、十八世紀に書かれた『勞四狂』という作品の一節である。本文中に、問題文甲にある「与其有誉於前、孰若無毀於其後。与其有樂於身、孰若無憂於其心」の読み下し文が引用されているが、ここでは白文に変換し、ゴチック体で示してある〕

我が膝頭の毛、長きこと三寸。ある人問ふ、「膝頭、毛の長きことかくのごときなるはいかに。」予が曰く、「我も知らず。いま我腰折膝行せざればなるべし。馬瘦せて毛長く、膝頭毛伸びて我肥えたり。」と言へば、その肥えたる所以を問ふ。予が曰く、「ここに人あり。富貴にして遊樂を常とし、美女美童を集めて、歌舞音曲、糸竹かまびすしく昼夜を分かつたずとも、他のそしり、世の聞こえをも憚ることもやあらん。遊樂は必ず長ず。奢りより生ずるが故なり。長ぜざれば面白からず。長ずるにいたりては猶飽き足らず、衆と樂するとして女童の数を並べ、輕薄者多く席に滿つ。この

時にいたり、黄金の心ほどに足らざる人もあり。また、黄金足れば、いさむる臣あり、あらそふ親族あれば、おのづから心塞ぐことあり。また、妓女妓童の楽しみ、糸竹音曲も、はなはだ興に入ることは、やうやう一刻二刻のうちなり。やがて興尽きぬ。さて、その楽しみをなして後に、**B** 官事世事にあづからざればならず。官事世事にかかりぬれば、先の遊樂は夢なり。官事世事につきて昼夜を分かつたず、二夜三夜も眠らざる人あらんに、その用果てたる時、美女美童を集め、糸竹音曲して楽しましめん時に、常に好む人といふとも、常々と同じく楽しからんか。また閑かなる室に入りて枕取り、一睡したらんが好むところならんか。また人あり。**C** 敵国に使ひせん時、寒風面を打ち、砂礫眼に入り、馬上手ががり、足屈して鎧を失ふに、その勞さへあるに、君命を辱しめざらんことを心中に苦しむこと、いかばかりぞや。この人と、また手づから耕し、あるは衰織りて今日を暮らす人と比ぶる時、いづれかよしとせん。」と言へば、かの人の言ふ、「その敵国に使ひする武士と、農人・蓑売りなどと、一つには論じがたし。農人・蓑売りのごとき者、願ひ望むともその武士にはなりがたく、その武士もまた、父祖の家を継ぎ来たれば、苦と勞をのがれむとて農人・蓑売りにもなりがたし。」と言ふ。予が曰く、「その身のその者になるならざるのことにてはなし。ただその人の家業によりて、苦と勞とのことを言ふのみ。また人あり。常に賓客を設け、酒肴を調へ、衣服美を尽くし、家居結構をなすが、黄金を人に借りて返す期に遅れ、貸したる人より催促厳しく、あるはうち腹立て、辱めを与ゆることなどもあり。また物調へてその価をやらずに、面押し拭ひて居る人あり。この人とまた、常に麩食を食らひ、衣服美なく、家居並々にして、人の金銀借らぬ人と、いづれをよしとせんや。前の人は客に交はり、佳酒佳肴の楽しみありといへど、負ふせ方の難あり。後の人は、楽しみなしといへども、心にうれひなし。古語にも、『**與其有譽於前、孰若無毀於其後。與其有樂於身、孰若無憂於其心**』といへども、その前にほまれ **1** て、そのしりへにもそしり **2** 、その身に楽しみ **3** て、その心にもうれひ **4** ば、猶よからめ。なれども、かくのごときの人にはなきものなり。我いま仕へをやめてすでに年あり。臥したき時に臥し、起きたき時起き、遊びたき所に遊び、行きたき時行き、帰るとき時帰る。春は花に暮らし、夏は涼風の来たる所に行き、秋の暮れの淋しきは酒に忘れ、冬の夜の寒をば火燵にし、雨降れば出でず、風吹けば出でず、常に瘵することを業とすれば、心中苦と勞なし。心苦なければ、安くして気塞がらず。気開く時は血巡る。氣血順なる時は、肥えずして何ぞ。』。

(注)「麩食」…粗末な食べ物。

問五 問題文乙の傍線部 A・B・E の意味として最も適當なものを、それぞれ次のイ～ニの中から選び、マーク解答用紙に答えよ。

- A イ 遊樂はのめり込んだら決して後もどりができない。  
 □ 遊樂はどうしてもより一層度を高めようとする。  
 ハ 遊樂はたしかに誰でも没頭することができる。  
 ニ 遊樂は常に年功を重ねて巧みになっていく。
- B イ 奉公や世間の雑事に関与しなければ楽しくはない。  
 □ 公私の雑用にかまけてなすべき事が実現できない。  
 ハ 宮仕えや家事に手間を取られることも仕方がない。  
 ニ 公務や俗事をこなしていけないわけにはいかない。
- E イ あなた自身がひとかどの人物になれるか否かなどということとは、私には関心はない。  
 □ 自分の身体がその職能にふさわしいかどうかは、ここでの議論とはまったく関係ない。  
 ハ 誰かがどういった職に就くとか就かないとかいった次元を、問題にしているのではない。  
 ニ その身分に生まれついた者は決められた生業に就くしかないという理屈は、肯定できない。

問六 問題文乙の傍線部 C に使われている活用語のうち、活用の種類が見出されないものを、次のイ～ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

- イ 未然形 □ 連用形 ハ 終止形 ニ 連体形 ホ 已然形

問七 問題文乙の傍線部Dに「一つには論じがたし」とあるが、この発言者はどのような理由からそう述べているのか。

その理由として最も適当なものを、次のイ～ホの中から選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ 身分の違いは生まれついで宿命であって、変更できないことだから。

ロ 支配者と被支配者では、その与えられた使命に根本的な相違があるから。

ハ 生産を担う農民が為政者に従うことこそが、世間の秩序を守る道徳だから。

ニ 労苦は同じでも、公の仕事と私的な仕事とは、社会的な意義が異なるから。

ホ 人間の器量は個々人に固有のものであり、努力をしても仕方がないことだから。

問八 問題文乙の空欄 1 4 のそれぞれには、「あり」「なし」のいずれかが入る。その語形の組み合わせ

として最も適当なものを、次のイ～ホの中から選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ 1 あり 2 あり 3 あり 4 あれ

ロ 1 あり 2 なく 3 なく 4 あら

ハ 1 あり 2 なく 3 あり 4 なくん

ニ 1 なく 2 あり 3 なく 4 あれ

ホ 1 なく 2 なく 3 なく 4 なくん

問九 問題文乙の傍線部F「仕へをやめて」と同じ意味を示す語句を含んだ一文が、「予」の発言の中にある。その文の初めの五文字を、解答欄(記述解答用紙)に記せ。なお、読点も一文字と数える。

問十 問題文乙に述べられている内容と合致するものを、次のイ～ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ 膝頭の毛が非常に長く伸びたのは、遊興の楽しみを心ゆくまで堪能した結果なのだ。

ロ 武士としての誇りを失うことなく、どのような労苦も厭わぬ人物を心から尊敬する。

ハ 富貴ではない人が生活に追われて借金を重ね、遊樂を全く体験できないことは気の毒だ。

ニ 引退して気ままに暮らす自分には、胸中に心配事が無いので、体調が整い太ってしまった。

ホ 四季それぞれの楽しみを堪能しながら自由に暮らすことが、人生最大の幸福だとは限らない。

問十一 『勞四狂』と同じく十八世紀に成立した作品を、次のイ～ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ 雨月物語      ロ 閑吟集      ハ 好色一代男      ニ 太平記      ホ 風姿花伝

(二) 次の文は、木下杢太郎が明治四十四(一九一一年)年に発表した「山水と人と」である(ただし、表記や表現を改めた箇所がある)。これを読んで、あとの問いに答えよ。

山水論という程のまとまった考えはない。かつて試みた旅行の回想としては予自身の経験では辛かった事、不愉快であった事はいつの間にか忘れて、感情に深く印象した事のみが永く且つ濃くあとまで残るように思う。凡て回想は、また、情調を基底とした時に最も鮮やかに現われる。今のように山水論という概念の連想からではしつくりとはやってくる。マデエラの濃い酒でも啜りながら、静かなる夜の哀愁と沈黙とを味わった後に、(ツルゲニエフの小説の主人公が語り出す時のように) そうだ、諸君、あの旅行の時にはとても語り初めなくては旅行談も興味が薄い。

南方は山水蘊藉<sup>うんしやく</sup>、北方は奇傑にして雄厚とは芥舟学画篇の書き出しだが、日本とても山水の範疇<sup>はんちゆう</sup>は大体四つか五つに分けられるだろうと思う。伊豆、房州、紀伊、九州の沿岸はかつて遊歴した事があるが、山海の情況、土地の人の気稟<sup>きりん</sup>等には共通した所が多い。予にまだ忘れられないのは九州平戸の港の夜である。同じような情景は、しかし予は紀伊の勝浦の港でも味わった事がある。

夜の一時頃になると、一度静まり返った港が再び騒がしくなる。

岸で人の歌ったラツパ節はいまだに忘れられない。和蘭陀塼<sup>オランダ</sup>、和蘭陀燈台、和蘭陀井戸などいう三百年前の盛時を語る古跡を残した平戸——それにジイボルトの本の中の絵や、日本西教史に出ている事柄などを結び付けて考えると、港もまた「運命」の記録である、という事をつくづくと感じるに至る。かくして港の歌には深い悲哀が籠っている。

予は北海を旅した事がないから、その荒涼たる風物に関しては知る所が少ない。しかし予には旅行というものは、山水と共にそこに棲む住民に対して、

3

的観相を下す事が出来るから面白いと思っている。予自身はまだ行って見た事が無いが、鹿児島などは旅行家にとっては随分面白い所だと思ふ。今は人の名も忘れ、尋ねべき本も手許<sup>とと</sup>にな

るので困るが、昔何とかいう国学者が、他郷人の旅行が甚だ面倒なので行商人に身を託<sup>たく</sup>して鹿児島へは入って行った事を書いたのを読んだ事がある。これ程の所故近頃<sup>ところごと</sup>までは随分違った風習も残っていた事と思ふ。あすこは元来氣候の温かい南国であるから人民も感情的であるはずだ。それをどういう条件があのようにスバルタ的の国にしたかなどを考へるのも面白いだろう。また女に対して非常に圧迫的な教育法を施した事などに対して文明的の考察を下したなら、土地が狭いだけに、人類に働く各種の力の

4

の有様も分かつて愉快だろう。「鹿児島の名物は早く目につく桜島、よめ女たちは頭にばら(籠のこと)をのせ……」云々の歌などを聞いた事があるが、此種の俗謡は直ちに未見の人

にも土地の景情を躍如<sup>よく</sup>として思い浮かべせる事が出来る。とにかく西洋人が日本一だと称<sup>た</sup>えるそうである。桜島を前に控えた鹿児島<sup>5</sup>の城下には、また昔は琉球の来貢などというエキゾチックな事件もあった。しかし近頃そこから来た人の噂によると、汽車の通じてからは万事がよほど変って来たそうである。近頃は人国記風の文章が流行だが、未だ深いドウサツのあるものも見出さぬようである。縷々<sup>るる</sup>いう事であるがゲエテの伊太利亜<sup>イタリヤ</sup>紀行のような面白い本は、あまりないと思われ。

今は凡てを平等化する力が強いから漸々と地方地方の特殊な事柄がなくなつてゆく。文芸委員会はいまに残る昔の地方俗謡を集める計画を立てたそうだが、単に歌謡の文句をあつめるばかりでは、懐中音曲集の類と選ぶ所がないだろう。一つの歌謡もその背後に或る地方、その住民、その生活、その因襲等をかくしている。麦搗唄<sup>むぎうた</sup>、糸繰り唄<sup>いとくりうた</sup>、盆踊の歌などは、たまたまは歌詞として優秀なるものもあるけれども、特殊の状況のもとに、直接、土地の人の歌うを聞く時の真なるに若<sup>し</sup>かぬ。江戸の小唄も「梅暦<sup>6</sup>」や、「荷風集<sup>7</sup>」「隅田川」の中に出てくればこそ意味もあるが、音曲大全の中では死んでしまう。俗謡の蒐集<sup>しゅうしゆ</sup>のごときもまた詩人の力を俟たねばなるまい。たとえば関東の糸とり歌に「蚕仕上げて上紺に染めて」、それから「武蔵の絹屋さん」という唄があるが、それも昔の糸取り場の工女、ないし一家族の中の女達<sup>8</sup>が、一人の音頭取りに連れて歌うて、そのあとで一斉に「あいよ」と拍子をとるといふような感情深い後景<sup>ごけい</sup>を考えて、その音曲の哀調を味わわねばならぬ。また麦搗歌にも「麦をつういて……」と歌うが、静かなる海岸の僻村<sup>へきそん</sup>に、あちらでも、こちらでも麦の歌が聞こえ、その間々に杵<sup>きね</sup>の音のボタン、コロン、ボタン、コロンの単調な寂しい拍子が入るといふ事を知らねばちつとも面白くない。

(注) 「ツルゲニエフ」…ロシアの作家ツルゲーネフ。

「芥舟学画篇」…中国の絵画の研究・解説書。

「ジイボルト」…ドイツの医学者・博物学者シーボルト。

問十二 空欄 1 には、次の四つの文A～Dが入る。この順序を正しく並べ替えたものを、後のイ～ホの中から選び、マーク解答用紙に答えよ。

- A 其の檣ほばしらに青、赤、黄の燈あかりがつく。  
B 人々が悲しい唄を歌って、船に積む荷を数えている。  
C 障子をあけると暗い港の真中に肅然として一艘そうの汽船が横たわる。  
D 枕許まくらもとには水楼の壁に寄せる夜の波のぴしゃらん、ぴしゃらんが如何にも寂しい。

- イ A→C→B→D □ B→A→D→C ハ C→B→D→A  
ニ C→D→A→B ホ D→B→A→C ヘ D→C→A→B

問十三 傍線部2「港もまた『運命』の記録である」とはどういうことか。最も適当なものを、次のイ～ホの中から選び、マーク解答用紙に答えよ。

- イ どの港にも、時代時代の歴史を刻んだ古跡や記録が数多く残されているということ。  
ロ どの港も、外国との関係を契機として、栄枯盛衰を経験した歴史があるということ。  
ハ どこに港が造られるかは、地形や対外的な関係から宿命づけられているということ。  
ニ 港ほど、人の運命を大きく変えて、生涯の転機になるような場所はないということ。  
ホ 港には、そこを経過した多くの人と歴史の記憶が幾重にも刻まれているということ。

問十四 空欄 3 に入る語句として最も適当なものを、次のイ～ホの中から選び、マーク解答用紙に答えよ。

- イ 画一 □ 感傷 ハ 逆説 ニ 鳥瞰ちようかん ホ 微視

問十五 空欄 4 には、「物事の順序・展開」を意味する語句が入る。漢詩の構成に由来し、漢字四字から成るその語句を、解答欄（記述解答用紙）に記せ。

問十六 傍線部5「躍如」の読みをカタカナで、また傍線部6「ドウサツ」を漢字に直し、楷書で正確に、それぞれ解答欄（記述解答用紙）に記せ。

問十七 傍線部7の「荷風集」「隅田川」は永井荷風の作品である。次のイ～ホの中から永井荷風の作品を一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

- イ 暗夜行路 □ 細雪 ハ 遷東綺譚 ニ 夜明け前 ホ 李陵

問十八 傍線部8に「俗謡の蒐集のごときもまた詩人の力を俟たねはなるまい」とあるが、著者はなぜそう思うのか。最も適当なものを、次のイ～ホの中から選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ 素朴で単調な俗謡のなかに、どれほどの魅力と文学性が秘められているかは、詩人の感受性によってはじめて発見されることだから。

ロ 俗謡には言葉がこなれていないものや表現の未熟なものがあり、詩人が洗練することで現代的な魅力をかがやかせることができから。

ハ 各地に埋もれた俗謡に数多く接し、多様な表現やリズムに触れる事は、近代詩の世界にとっても大きな収穫をもたらすことになるから。

ニ 詩趣を求めて各地を旅する詩人には、その土地の風俗や人々との交流を通して、埋もれたままのすぐれた俗謡を発掘する機会が多いから。

ホ 詩は古来から読むものであるよりも歌うものであり、自作を朗読したり朗誦することの多い詩人が、その特長を最もよく把握することができから。

問十九 本文の内容と合致するものを、次のイ～ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

- イ 山水というのは、論じる対象であるよりも直接に味わうもの、経験するものであって、どんなに多くの旅行記や紀行が刊行されても、興味を惹かれるものに会えることは稀である。
- ロ 中国では、寛大で穏やかな南方と、厳しく雄厚な北方の山水が対比されて論じられるが、日本の場合はむしろ南方の風土のほうがスパルタ的で厳しいという特色をもっている。
- ハ 旅行をするということは、その土地土地を文明的な視点で観察することであり、その土地の歴史に分け入っていくと、旧弊な風習や悲哀に富んだ出来事に数多く出会って失望する。
- ニ 汽車の発達によって旅行の便宜が格段に増してきた結果、辛かったり不愉快になったりする経験は少なくなってきたが、本当に愉快で感情に深く刻まれるような体験も少なくなってきた。
- ホ 各地に伝わる俗謡は、その土地の風土と生活に深く根ざしたものであって、網羅的に集められた音曲集などで歌詞だけを読んでも、その魅力が十分に伝わらないことが多い。

(三) 次の文を読んで、あとの問いに答えよ。

編集の都合により省略

そこからようやく立ち上がってくるへ待つが。

(鷲田清一の文章による)

問二十 次の文章は、空欄

イ

ホ

のいずれかに入る。最も適当な箇所を、マーク解答用紙に答えよ。

すでに知っているもののうちでいまだ知らないものを測っているのである。このとき、未知は既知の一樣態ではない。

問二十一 傍線部 A の「言葉によってひとは時間の地平を超える」の説明として最も適当なものを、次のイ～ホの中から選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ 言葉は事物を現前しない不在のものとして表象するという性質から、その使用によってつねに時間を超えることができるということ。

ロ 言葉は事物そのものではないので、言葉をもって表現したとき、その指示対象の事物は時間とともにある世界からも切り離されるとのこと。

ハ 言葉というものが時間を切り分け、過去、現在、未来を生み出すので、その使用によって、過去、現在、未来の時間を往還し得るとのこと。

ニ 現前しないものも言葉によって喚起できるように、言葉の使用によって時間の拘束を離れて、無時間の世界に生きていることが可能になるとのこと。

ホ 「いま」といっても必ずしも現在を指示しないように、言葉がもつ意味の許容範囲は非常に広いもので、言葉によって時間を規定できないということ。

問二十二 空欄 1 4 には、過去・現在・未来のいずれかの語が入る。その組み合わせとして最も適当なものを、次のイ〜ホの中から選び、マーク解答用紙に答えよ。

- |   |   |    |   |    |   |    |   |    |
|---|---|----|---|----|---|----|---|----|
| イ | 1 | 未来 | 2 | 過去 | 3 | 現在 | 4 | 未来 |
| ロ | 1 | 過去 | 2 | 現在 | 3 | 現在 | 4 | 未来 |
| ハ | 1 | 現在 | 2 | 過去 | 3 | 現在 | 4 | 未来 |
| ニ | 1 | 過去 | 2 | 現在 | 3 | 未来 | 4 | 現在 |
| ホ | 1 | 現在 | 2 | 過去 | 3 | 未来 | 4 | 現在 |

問二十三 空欄 5 6 には、次のイ〜ホの語句のいずれかが入る。それぞれ最も適当なものを選び、マーク解答用紙に答えよ。ただし、同じ記号を二度用いてはならない。

- イ はたまたま    ロ とはいえ    ハ 要するに    ニ ただし    ホ のみならず

問二十四 傍線部 B の「いま」と口にするとき、……ものから切り分ける」の説明として最も適当なものを、次のイ〜ホの中から選び、マーク解答用紙に答えよ。

- イ 「いま」は現在を意味する言葉であるが、現在は過去や未来なくして存在することができないので、「いま」という瞬間は現実存在し得ないということ。
- ロ 「いま」という現在を意味すると思われる言葉は、「いま」という言葉を口にした途端に過去に属するものとなり、「いま」から切り分けられてしまふということ。
- ハ 「いま」という現在を意味する言葉も実は現在の時間を表すばかりでなく、その意味は文脈によって規定されるので、「いま」と口にする度にその意味が変容するということ。
- ニ 「いま」という現在を意味する言葉は、現在が過去や未来と判然と切り分けられないように、「いま」と口にしたとき、それが過去か未来のことか判別できないということ。
- ホ 「いま」という時間もつねに過去の想起としてしか現出しないので、「いま」と発言した途端に現在ただいまの「いま」が排除され、過去の制約をうけてしまふということ。

問二十五 空欄 a に入る漢字一字を、楷書で正確に、解答欄（記述解答用紙）に記せ。

問二十六 傍線部 C の「行為がまだ完了していないとき」に使用された「いま」の用法を含む歌を、次のイ〜ホの中から一つを選び、マーク解答用紙に答えよ。

- イ  いつの間に五月来ぬらむあしひきの山時鳥いまぞ鳴くなる
- ロ  朝露を分けそほちつつ花見むといまぞ野山をみな経知りぬる
- ハ  あな恋しいまも見てしか山賤の垣ほに咲ける大和撫子
- ニ  この川にもみぢ葉流る奥山の雪げの水ぞいま増さるらし
- ホ  形見こそいまはあだなれこれなくは忘るる時もあらましものを

問二十七 空欄 b c に入る最も適当な語句（漢字二字）を、それぞれ本文中から抜き出し、解答欄（記述解答用紙）に記せ。

問二十八 本文の論旨に合致しないものを、次のイ〜ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

- イ 私たちが未来に希望をいだいたり、過去を追憶したりし得るのは、言葉というものが現前しないものを喚起することができるからで、こうした言葉の切り分けによって時間というものも制作される。
- ロ 私たちの意識の外に過去なるものが独立してあるのではなく、想起される命題の言語的意味の中に実在するよ  
うに、未来もまた私たちの意識があらかじめ未来の到来に先立って制作したものである。
- ハ 私たちが言葉を使うとき、必ずしも厳密に時制を意識しているわけではなく、現在形を用いたとしても、過去  
に属することがらや未来のいまだ完了していないことがらを語っている場合も多い。
- ニ 私たちは過去を現在から切り分け、過去を自由に制作することができるが、個人の過去が幾度も語りなおされ、  
語り改められるように、歴史的事実も現在の立場から書き換えることができる。
- ホ 私たちが何かを待ち望むというとき、未来を語るかに見えて、実は未来を完了態で先取りしようとする欲望が  
ひそめられているが、未来にはあらかじめ何が起こるか分からない要素も存する。

〔以下 余白〕